

フォーラム&活動だより
江戸東京
フォーラム

「東京の近代和風建築」をテーマとする、第181回住総研江戸東京フォーラムが、2009年7月25日、和敬塾(旧細川侯爵邸)を会場に開かれた。「東京の地域学を掘り起こす」シリーズの第7回でもある。

フォーラムに先立ち、会場である旧細川侯爵邸の見学会が開かれた。この建築は、旧熊本藩主細川護立邸として、昭和11(1936)年に建てられた。基礎や円筒状の張り出し部分に石を貼った、重厚な外観。内部もウイリアム・モリスを彷彿とさせる壁紙など、洋風意匠を基調とするが、2階に10畳2室からなる立派な和室が組み込まれている。また、ベッドを用いる寝室も、床の間風の飾り棚や割竹を用いた壁仕上げなど、近代数寄屋の優れた意匠を感じさせる。まさに、フォーラムのテーマにぴったりの会場であった。

フォーラムでは、波多野の趣旨説明に続き、内田青蔵さん(神奈川大学)、後藤治さん(工学院大学)、小沢朝江さん(東海大学)、河東義之さん(元千葉工業大学)が、パネラーを務めた。

新しい文化財保存の方向を示す
近代和風建築調査

近代和風建築の全国的な総合調査が、

文化庁の主導で実施されている。東京都は、2006年度から3年かけて調査をおこない、400頁近い大部の報告書が刊行された(『東京都の近代和風建築―東京都近代和風建築総合調査報告書』09年3月、東京都教育庁地域教育支援部管理課)。調査には関東地区の建築史研究者の多くが参加し、各市区町村の教育委員会と連携を取りながら地域を分担した。この結果、これまで注目されなかった、地域の歴史的価値のある建築が多数発見された。今後、この中のかんりの建築が有形登録文化財に登録され、さらに国の重要文化財となるであろう。

近代和風建築が文化財調査の対象となることには、感慨深いものがある。社寺建築中心の逸品主義を基本とする文化財保護政策から、日常生活に根付いた「記憶の風景」の核となるような建築の価値を認める政策への、大きな流れが定着したことを強く感じる。

同時に、モダニズムの相対化ができたのだとの実感がある。私は、1970年に大学の建築学科を卒業、正統派モダニズムの最後に属する世代である。当時、和風建築の設計を目指す者など一人もいなかった。「風呂屋みたいな建物」と言って片付けるように、際物として近代の和

風建築に注目することはあっても、学ぶべき対象ではなかった。そこに隠された、建築への熱い思いを見逃していた。昭和10(1935)年に竣工した、目黒雅叙園百段階段。大工棟梁・酒井久五郎がもてるすべての技を駆使した、まさに情熱あふれる建築彫刻と極彩色の圧倒的な迫力に、押しつぶされそうになる。これを魅力だと感じる目を若い頃にはもてなかった。今は素直に楽しいと感じる。

「和風建築」とはどんな建築であろうか。近世以前の伝統的な建築を和風建築と呼ぶことはない。「洋風建築」の導入後に対比的に成立する概念であろう。しかし、和風建築と洋風建築は対立的な存在ではない。旧細川侯爵邸でみたように、洋風の外観に優れた和風意匠の室内が隠されていることも少なくない。

「近代和風建築」は、近世以来の伝統を墨守した建築ではない。そこに新たな価値の誕生をみることができ。まず、建築類型が豊かである。住宅・官舎・アトリエ・茶室・別荘・商店・料亭・学校・学生寮・図書館・講堂・道場・能舞台・事務所・駅舎・酒造所・倉庫・集会所・病棟・水車小屋・神社・参集殿・寺院・庫裡。この多様性こそ、近代社会が生み出したものである。1次調査4439件

東京の
近代和風建築

―「東京の地域学を掘り起こす」シリーズフォーラム
第7回

波多野 純



●波多野純(はたのじゅん)

日本工業大学教授。工学博士。1970年、東京工業大学工学部建築学科卒業。1977年、日本工業大学工学部講師。1978年、波多野純建築設計室設立。1986年、日本工業大学工学部助教授。1991年より現職。

1998年、『江戸城Ⅱ(侍屋敷)』で、建築史学会賞受賞。ネパールの仏教僧院イ・パハ・バヒの保存修復で、日本建築学会賞(業績、共同)受賞。

著書に、『復原・江戸の町』(筑摩書房)、『江戸名所図屏風の世界』(共著、岩波書店)、『The Royal Buildings & Buddhist Monstris of Nepal』(共著、中央公論美術出版)ほか。

のうち68%が住宅建築であり、社寺建築中心ではない。建築意匠もきわめて多様であり、「近代和風建築」を一元的に定義することは不可能である。むしろ、この日の報告の中から、一人ひとりの近代和風建築像が構築できればと思っている。4名のパネラーは、調査に基づく詳細な報告と、そこから抽出される成果や問題点を指摘してくださった。具体的な内容は、東京都の報告書を参照していただくこととし、ここでは、特に印象に残った部分だけを報告する。

近代和風建築の設計技術

内田青蔵さんの報告

文京区・豊島区、練馬区の一部を担当した内田さんが、最初に取り上げたのは「講談社野間道場」(文京区)。5間×16間の大規模な剣道場に宿泊室が付属する。大正14(1925)年の竣工であるが、昭和8(1933)年まで、増改築が繰り返された。伝統的な格式を重んじる武道場建築であるが、床下にスプリングを入れ、小屋組を大スパンのトラスとし、トップライトで明るさを確保するなど、新たな技術を導入している。

「同潤会江古田分

譲住宅 佐々木邸」

(練馬区、昭和9年)

は、同潤会の庭付き



内田青蔵さん

一戸建て分譲住宅として、ほぼ当初の姿で残っている貴重な例である。同潤会の事業としては、鉄筋コンクリート造の都市型集合住宅がよく知られるが、郊外において分譲住宅事業も展開した。この江古田住宅の分譲は高い人気で、平均18.5倍の高倍率であった。佐々木邸は、敷地規模も当初のままで、アールデコ風の洋間の意匠から家具まで、当時の雰囲気をよく伝えている。

さらに内田さんは、清水建設に残る歴史的な住宅設計図面を基に、その寸法体系を検討した(『彩色図集』に見られる近代上流住宅の設計手法について)、住宅総合研究財団編『明治・大正の邸宅 清水組作成彩色図の世界』2009年、柏書房)。麻布に大正10年に建てられた古河虎之助邸を例にとると、客間などの接客空間は京間(1間Ⅱ6尺5寸)、居間など家族の生活空間は中京間(6尺3寸)、書生部屋など使用人の空間は田舎間(6尺)と、部屋の格式に応じて尺度さらには空間ヴォリュームに格差を付ける設計システムが採用された。この指摘は、部屋の格式はその設計システムにより決定されるという、きわめて本質的な概念を提示している。

市街地の拡大と中央線文化圏

後藤治さんの報告

後藤さんは、まず「哲学堂公園」に着

目した。東洋大学の創始者で哲学者の井上圓了が精神修養の場として創立し、明治36(1903)年から大正4(1915)年に整備された。四聖堂(明治37年)は、孔子、釈迦、ソクラテス、カントを四聖人として祀った建築で、三間四方の平面に方形屋根を載せた、伝統的な仏堂建築である。講義室である宇宙館(大正2年)も四間四方の方形造であるが、宝珠ではなく烏帽子が載る。面白いことに、向切妻破風の玄関が45度に振って取り付いている。陳列室である無盡蔵(明治42年、45年)と図書館である絶対城(大正4年)は、2階建ての寄棟造であり、外壁はトタン板にペンキを塗った洋風である。哲学堂は、哲学を主体としたテーマパークのようであり、伝統的な社寺建築の様式や洋風の新しい素材を、建築の用途に合わせて使い分ける、近代的な意識が感じられる。

「高千穂学園武道場」(杉並区)は、学園創立に合わせ大正3年に建設された。設計・施工とも清水満之助本店(現・清水建設株式会社)。外壁を南京下見板張りペンキ塗り、小屋組をクイーンポストトラスとする。床下にスプリングを入れ、さらに音響効果を考えて9個の瓶が設置されている。床下の



後藤治さん

瓶は、能舞台のために伝統的に用いられる技術である。

大正14年の「旧近藤邸」(杉並区)は、施主である近藤謙三郎自身が設計した小住宅である。近藤は、東京帝国大学土木科を大正10年に卒業し、内務省都市計画東京地方委員会技師として、戦前に新宿西口の都市計画を推進した人物である。外観は洋風であるが、内部は和室の占める割合が大きい。玄関を半戸外のテラスに設け、直接リビングに入るなど、新しい時代の息吹が感じられる。この住宅は、宮崎駿の「トトロの住む家」として知られたが、2009年2月に火災で大きな被害を受けた(本誌66頁「すまい再発見」参照)。

後藤さんが担当した中野区・杉並区は、大正12年の関東大震災後に急速に住宅地化した地域である。旧近藤邸も震災復興期の小住宅である。さらに、震災復興期の木造平屋建の小住宅や銭湯など、近代史のそれぞれの時代を語る建築が残っている。

上野・谷中が発信する文化の香り

小沢朝江さんの報告

江戸東京フォーラム
江戸を下敷きに発展した多摩都市東京に織り込まれた歴史的・文化的意味や地域特性を発掘し、現代に生かす方法を考え、日本人のこれからのより豊かな住環境形成に寄与することを期待して開催する公開フォーラム
現在の委員は、陣内秀信(委員長、法政大学教授)、稲葉佳子(法政大学大学院兼任講師)、入江彰昭(東京農業大学講師)、小沢朝江(東海大学教授)、小澤弘(財団法人東京都歴史文化財団・江戸東京博物館教授)、小林克(財団法人東京都歴史文化財団課長)、波多野純(日本工業大学教授)、森まゆみ(作家)、吉見俊哉(東京大学教授)。

台東区を担当した小沢さんがパワーポイントで最初に示したのは、第二次大戦の戦災焼失図である。上野公園と谷中地区を除き、ほとんどを焼失した。江戸時代、上野の山には寛永寺とその子院が建

ち並んでいたが、戊辰戦争により焼失。明治時代には、動物園・博物館や東京美術学校・東京音楽学校が設けられた。

両校を前身とする東京芸術大学の構内には、優れた近代和風建築が残っている。「旧東京美術学校本館玄関」は、大正2(1913)年に竣工した建築の一部を、昭和47(1972)年に移築したものである。入母屋造の妻を正面に向け、胴張りのある太い丸柱が立つ。「古くは奈良朝風から其後のものを斟酌し、洋風建築をも加味した一種明治式といふべき」と説明されており、時代の雰囲気がよくわかる。「六角堂」(昭和6年)は、美術学校創設者・岡倉天心の銅像を納める吹放ちの小堂で、設計は同校講師・金沢庸治。「正木記念館」(昭和10年)は、同校五代校長・正木直彦を記念して建てられた作品陳列館で、設計は同じく金沢。城郭櫓門のような外観で、2階には日本画を展示するための、正統的な数寄屋風書院の和室が組み込まれている。襖絵は橋本雅邦、欄間彫刻は高村光雲などと、一流の芸術家が参画し質の高い空間を構成している。

美術学校の周辺には、多くの著名な芸術家が居を構えた。朝倉文夫のアトリエと住宅として建てら



小沢朝江さん

れた「朝倉彫塑館」は、その中でもきわめて質の高い例である。朝倉は、明治40年(1907)年にすでに、この谷中に居を構えており、大正13年の旧アトリエ棟が現存する。その後、アトリエを鉄筋コンクリート造、他を数寄屋造りで建て替えることとし、自らの設計で、昭和10年(1935)年に竣工した。アトリエ棟は、コンクリート打放しの上にアスファルトを塗り、コーナをすべて丸くした、印象的な外観である。その奥に、住居棟・玄関棟・廊下・応接室が、庭を一体的な雰囲気で見包みこむように建つ。数寄屋風意匠の住居棟は、丸太や面皮材をうまく使うなど、朝倉の優れた感性が随所にみられる珠玉の建築である。

近代和風から時代が見える

河東義之さんの報告

「前田侯爵家駒場本邸 和館」(目黒区)は、旧加賀藩主前田家の邸宅の一部として、昭和5(1930)年に竣工した。当初は洋館だけを建てる計画であったが、迎賓館として和館を必要とした。設計は塚本靖・佐々木岩次郎、施工は竹中工務店である。近代和風住宅の水準の高さを示すきわめて上質の意匠で、2階として設けられた楼閣風の方形屋根が外観を特徴付けている。

つぎに、「武蔵御嶽神社本殿」(青梅市)



河東義之さん

と「同旧宝庫」（明治39年）を取り上げる。本殿は、慶長11（1606）年に建てられた流造の旧本殿（現・摂社・常磐堅磐社、都指定有形文化財）を移して、明治10（1877）年に神明造で建て替えたものであり、時代の風潮をよく伝えている。旧宝庫は、当時の仕様書によると、「工科大学教授工学士関野貞氏 内務省造神宮技手桐山平八郎氏 設計」で、外壁・屋根・床には防湿のためであろう「大鋸屑、石灰、末粉」が詰められている。古社寺保存や建築史研究に大きな足跡を残した関野貞の設計になる貴重な建築である。

「JR青梅線御嶽駅舎」は、昭和4年建設当時の外観をよく残している。御岳山や奥多摩への観光客誘致のため鉄道が伸延され、駅舎も武蔵御嶽神社参拝の玄関口にふさわしく和風意匠が採用された。入母屋造の屋根の下、二方向に土庇を廻し、それぞれに唐破風を取り付けており、大規模な駅とは異なる暖かさが感じられる。

河東さんが担当した青梅市や奥多摩町には、養蚕農家、青梅街道沿いの見世蔵、参詣客や観光客のための施設など多様な建築が、それぞれの時代を象徴するよう

に展開している。

多様性こそ近代和風建築の特質

討論では、近代和風建築の定義の難しさが改めて話題になった。4人のパネラーの報告から、「近代和風建築とは何か」を整理することはできそうにない。むしろ、その多様性に、近代和風建築の豊かさが浮かび上がった。一方、「これだけ多様な建築があるのは、東京の特殊

性・地域性ではないか」との、参加者からの発言もあった。また、「この建築はすでに失われまじた」との報告がいくつかあったように、日々の暮らしに根付き歴史的に重要な建築が毎日のように失われている。近年は、放火など暴力的な破壊行為も後を絶たない。東京都の調査や今回のフォーラムが、その流れを食い止める一助となることを願っている。

●小沢朝江（おざわ・あさえ）

東海大学工学部建築学科教授。博士（工学）。1967年、東京理科大学工学部建築学科卒業。1988年、神奈川大学大学院修士課程修了。湘北短期大学生活学科助手、専任講師、助教授を経て、2002年、東海大学工学部建築学科助教授。2007年より現職。著書に、『明治の皇室建築 国家が求めた「和風」像』（吉川弘文館）、『日本住居史』（共著、吉川弘文館）ほか。1999年、日本建築学会奨励賞受賞。

●河東義之（かわひがし・よしゆき）

工学博士。小山工業高等専門学校名誉教授。1967年、東京工業大学理工学部建築学科卒業後、同大学工学部助手。76年、小山工業高等専門学校助教授。89年、同教授。99年、09年、千葉工業大学工学部建築都市環境学科教授。02年、「旧日光田母沢御用邸本邸に関わる調査と修復工事」で日本建築学会賞（業績、共同）受賞。著書に、『ジョサイア・コンドル建築図面集』（中央公論美術出版）、『建築探偵術入門』（共著、文芸春秋）、『図説日本建築年表』（共著、彰国社）ほか。

●後藤治（ごとう・おさむ）

工学院大学建築都市デザイン学科教授。博士（工学）。1984年、東京大学工学部建築学科卒業。1988年、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程中退。文化庁文化財保護部建造物課文部技官。1995年、文化庁文化財保護部建造物課文化財調査官（調査部門）。1999年、工学院大学建築都市デザイン学科助教授。2003年より現職。著書に、『都市の記憶を失う前に』（共著、白揚社）、『図説 日本の近代化遺産』（共著、河出書房新社）ほか。

●内田青蔵（うちだ・せいぞう）

神奈川大学工学部建築学科教授。工学博士。1975年、神奈川大学工学部建築学科卒業。1983年、東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻博士課程退学。1985年、東京工業大学工学部附属工業高等学校教諭。1995年、文化女子大学造形学部主任環境学科教授。2006年、埼玉大学教授。2009年より現職。著書に、『あたりか屋商品住宅』（星雲社）、『日本の近代住宅』（鹿島出版会）、『明治・大正の邸宅 清水組作成彩色図の世界』（柏書房）、『同潤会に学べ 住まいの思想とそのデザイン』（王国社）ほか。